

第四講 スパルタ帝国の性格

リュサンドロスの帝国体制 (Plut. *Lys.* 13. 3-4)

「民主政やその他の政治体制を廃止し、それぞれのポリスにラケダイモン人の司政長官一人、ポリスごとに自ら組織した仲間の中から十名のアルコンを残したのであった。おまけにそのことを敵対しているポリスにおいても同盟国となったポリスにおいても差別なく行い、時間をかけて沿岸伝いに航行し、ある意味で自分のためにギリシアの覇権を手に入れたのであった。というのは高貴なものたちや富裕者をアルコンに任命せず、仲間や特に親密な間柄の人々に国事を引渡し、賞罰の権限を渡し、自ら数多くの死刑判決を下し、親しくしている人々の敵を追放し、不当にもギリシアにラケダイモン人の支配の型を与えたのであった。」

スパルタの指揮権 (Xen. *Hell.* 2. 2. 20)

「ラケダイモン人はギリシアの地に起きた非常な危機に際して大いなる功績を成し遂げたギリシアのポリスを奴隷化すべきではないと述べ、長壁とペライエウスを取り巻く市壁を解体し、12隻を除く艦船を引渡し、亡命者を帰国させ、ラケダイモン人と同じ敵と友を承認し、陸上においてであれ海上においてであれ彼らが指揮するところ何処へでも随行すべきことという条件で講和条約を締結したのであった。」

敵対派の追放とデカルキア (Xen. *Hell.* 2. 3. 6-7)

「[6]リュサンドロスによって全周包囲されたサモス人が、最初、協定を結ぶことを望まなかったので、リュサンドロスは直ちに攻撃することを考えていたが、自由人は各人一枚の衣服を携えて退去し、全てを引き渡すことに同意した。このようにして彼らは退去したのであった。[7]リュサンドロスはかつての市民にポリス並びに万事を委ね 10名のアルコンを任命し、同盟艦隊を祖国に向けて航行させ解散した。」

スパルタ国内の党派対立と妬み (Xen. *Hell.* 2. 4. 29)

「事態がこのように好転すると、パウサニアス王はリュサンドロスを妬み、リュサンドロスが以上のことを成し遂げることにでもなれば、一方では名声を博し、他方ではアテナイを自分のものにしてしまうのではないかと、三名のエフォロスを説得して軍を率いて出陣したのである。」

ポリス間の人的結合と政治体制(Xen. *Hell.* 3. 4. 7-8)

「アゲシラオスが平静かつ悠々とエフェソスで時を過ごしていると、諸ポリスにおける政治体制は混乱しており、アテナイ人の許にあったような民主制は存在せず、リュサンドロスの許にあったようなデカルキアも存在しなかった。すべての人がリュサンドロスを知っていたので、彼に近づきアゲシラオスから必要とするものを手に入れようと考えたのであった。そしてこのために膨大な数の人々が彼に従ってご機嫌を取ったので、アゲシラオスは私人のように見え、リュサンドロスは王のように見えたのである。[8]そのことに激怒したことをアゲシラオスは後に明らかにした。その他三十人（の側近たち）は妬みから黙っていることはなく、リュサンドロスは王権をも凌ぐ尊大なもので法を犯すものであるとアゲシラオスに語ったのである。」

陸上部隊

- 前399年 ティブロン遠征 5000名（ネオダモデイス 1000名）
Xen. *Hell.* 3. 1. 4.
- 前397年 デルキュリダス遠征 7,000名
DS. 14. 39. 5.
- 前396年 アゲシラオス遠征 8000名（ネオダモデイス 2000名）
Xen. *Hell.* 3. 4. 2.
10000名（DS. 14. 79. 2）
- 前395年 パウサニアス王のフォーキス遠征 6000名
DS. 14. 81. 1.
- 前394年 ネメアの戦い 13,500名（内6,000名 ライケダイモン人）＋
600騎＋300名（クレタ人弓兵）＋400名（投石兵）

Xen. *Hell.* 4. 2. 16.

前383年 オリュントス遠征 10,000名（内 ネオダモデイス・スキ
リティス人 約2,000名）

Xen. *Hell.* 5. 2. 20; 24.

前371年 レウクトラの戦い （スパルタ市民兵約700名）

Xen. *Hell.* 6. 4. 15.

海上帝国の欠如

制海権の維持ではなく、アテナイの海上勢力と対抗し交易ルート遮断が
目的

艦隊：アテナイとの戦争継続のため＝戦略上の対称性

対アテナイ戦終了と共に艦隊の解散

あくまでも対アテナイ戦遂行の為の道具

外交による帝国追求

親スパルタ政権

ハルモステス

守備隊の駐留

内政干渉

民主政の廃止・寡頭政の樹立

ハルモステスの設置

十名のアルコン（リュサンドロスが組織した政治結社・特別な間柄の
人々より選出）

裁判権を十名のアルコンに

死刑執行に立会い

仲間の敵を追放

スパルタ式の政治を強制

守備隊の駐留

強大な軍事力

艦隊の維持

ペルシアからの補助金：ペルシア王子キュロスとの私的關係

同盟諸国からの寄付金

1,000タラントン以上の貢税（DS. 14. 10. 2）

スパルタ本国の財政的脆弱性

安定的財源の欠如

スパルタ戦隊の弱小性

同盟艦隊への依存

外国人傭兵への依存

艦隊継続の欠如（Xen. *Hell.* 2. 3. 7-8; 3. 4. 28）

300 X 30days X 200persons X 100ships X 8months=400T/year

Xen. *Hell.* 2. 3. 7; 14, Plut. *Lys.* 13.

ポリス間の人的結合

ヘタイレイア・クセニア・フィリアが帝国支配の核

スパルタの政治指導者との私的關係（友人）がポリス間の公的關係
を規定

保護と協力の道徳的要請

スパルタ国内の指導者間の対立が外交政策に反映

競争社会としてのスパルタの文化（名誉と恥辱）

キナドンの陰謀の素地

リュサンドロスとカッリクラティダスの対立

Plut. *Lys.* 6.

リュサンドロスとパウサニアス王との対立（嫉妬）

Xen. *Hell.* 2. 4. 29. Cf. DS. 14. 33. 6, *Lys.* 18. 11-12, Paus. 3. 5.

4f.

アテナイ民主派との講和

アテナイでの経験が後世伝えられる

アゲシラオスとリュサンドロスの対立

Xen. Hell. 3. 4. 7-9, Plut. Ages. 7, Lys. 23.

スパルタの帝国支配の脆弱性

同盟国内の党派対立に引き釣り込まれる

スパルタ国内の対立が対外政策に連動

アテナイでの民主政対寡頭政、十人体制のプロパガンダに利用

人口減少

戦術の変化